

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町3-10-13 金岡ビル 205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : nakachurch.welcome@gmail.com HP : w01.tp1.jp/~ja66945502/
発行者 石倉夕子 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

「空の村号」に出演して

牧野美登里



三十年近く反原発運動をして、チェルノブイリの被災地や福島へ何度か行った。たくさんのお苦しみ、悲しみを聴いた。劇を通し、被災者の君地にさらに近づけた。
この苦しみを次世代に残さない！

牧野 美登里

二〇一一年三月二日、あれから三年が過ぎても、復興は名ばかり。被災した人々の苦しみが、癒されることなく、深まっている。震災関連の自殺も増えているという。特に震災の被害だけではなく、福島原発の事故によるダメージは計り知れない。家族が地域がばらばらにされたまま、原発は未だ収集もつかず、今よりひどくならないように、懸命の事故処理の作業が続いている。多くの労働者を犠牲にしながらい。そんな現実をえがいた、福島朗読劇「空の村号」になか伝道所のメンバーの牧野美登里さんが出演された。今回出演された中で、感じたことなどを語ってもらった。

「空の村号」——福島朗読劇のあらすじ

二〇一一年三月一日大きな地震。そして福島原子力発電所の事故。のどかで、仲よく、豊かで、幸せな生活があった原発から少し離れたこの村は、「放射能は大丈夫。気にすることは無い。気にする方が体に悪い」と役場や、政府の偉い人、学者に言われ、確かな情報は知られなかった。しかし、皆が少しずつ不安になり、気持ちの少しづつバラバラになっていく。昨日まで「安全」と言われていたのに今日「全村避難指示」と言われ、大事に育ててきた牛を処分し、畑を捨て、家族、友人が離ればなれになっていく村の人たち。この奪われた生活の中で、希望はあるのか。どこにあるのか。家族って？ 村って？・・・。

フクシマを忘れないで・・・

この劇は篠原久美子さんという脚本家の作品です。この劇の取材場所は飯館村ですが、篠原さんは飯館村だけでなく、福島の問題として捉えてほしいと願っています。劇に出てきた酪農家の泰造おじさんは、長谷川憲一さんという人がモデルです。彼は牛を全頭処分せざるを得なかった酪農家で、劇中では男の子の空君のお父さん役を演じています。劇の後半は村の放射能汚染が分かり、空君と妹の海ちゃんを東京に送り出す所で終わっています。長谷川さんと村長は、村おこしをとんでも頑張ってきたのです。村長はエコ宣言をし、トルコキキョ

ウを村の目玉商品に仕立てて頑張ってきた。劇中の晶(あきら)監督という人はずっとイラクを撮ってきて、後に飯館村で長谷川さんを中心に記録し映画にした監督ですが、行く度に悲しみが伝わってくるそうです。篠原さんは晶監督と一緒に福島に行きました。劇中では子どもが出てきますが、村では子ども姿は一人も見なかった。この映画を飯館村の劇として宣伝しないでほしいと言われています。しかしこれが福島の人たちの日常だと思えます。山や川で遊び、畑の作物を食べ、売っていたのに、それまでは安全、安全と言われてきて、ある日突然危険だから出ていけという形でその日常が奪われました。これは本当に福島全体のことだと思います。

私たちは五月に三回目の「リフレッシュ

@かながわ」(神奈川県主催の福島原発事故による被災家族のための保養プログラム)で西郷村の方々を呼びました。そこは線量も少なく、皆日常の生活を続けていますが、持っている不安は同じだったと思います。私は保養としてチェルノブイリの子どもたちを二二年ほど受け入れてきましたが、まさか日本で原発事故が起きるとは思わなかったのです。しかし今回起こってしまいました。色々知っていきながら危険を伝え続けられなかった自分を愚かだと思っています。日本はあの事故から何も学びませんでした。当時のソビエト連邦よりは市民の情報公開への希求が強く、事故後三、四年経ってから情報が流されたウク

ライナよりは早く公開されているように思

います。しかし今、福島での検診で十数人に癌が見つかったと言われている中、癌は四、五年経ってから出るものなのに、今出てきているというのは原発事故と関係ないと言われています。そんなことはないのです。チェルノブイリでは即出てきたというのが現実なので、私はもつとチェルノブイリのことを学べば、これから日本が、福島が、どのようになっていくか、除染後に帰ってからどうなるかが分かると思うのです。ですから、皆さんももう一度チェルノブイリのことを見直して、見てもらえたらと思います。

私たちにできること

この劇で私は「今年はいかにいい食べ物が出てきた。だけどこれは毒なんだ」と言つて、ものすごくショックを受けているおばあちゃん役でした。本当にあれは福島のお心だろうと思います。私にとつても一番言いたいことです。この場面の後、空君はお父さんの実家で、おじいさんの東京の家に行くために村を出ていきます。空君の友だちも一人は北海道、もう一人は隣村の汚染地域で生活することになります。仲の良かった友達もそうやってバラバラになっていくのです。子ども心に本当に辛かっただろうと思うのです。私はこの劇に出演し、えつ！と思う言葉も幾つかありましたが、でも本当にそれが福島全体の思いでもあり、又色々な人がいて色々な形の福島が

あると思いました。

私たちは「リフレッシュ」かながわ」をやりました。他の団体の呼びかけなど、色々な形の保養もあります。皆でできることをやっていくことが必要だと思います。三月一五日には東京や神奈川にも放射能が降り降りました。見えない、感じない日常を送っていますが、現実には畑や水が汚れ一〇〇ベクレルのものまでは市場に出していいと言う政府の言葉で流通しているものを私たちは食べています。それが私たちの体に影響してはいないとは言えません。決して福島だけの問題ではありません。横浜に住んでいても、福島と同じなのです。福島の人の声も聞きながら一緒に行動していけたらと思っています。

又、劇と同時にトークイベントをし、福島告訴団の団長をしていた武藤類子さんという人呼びました。彼女は『これでも罪に問えないのですか』という原告の人たちの声を集めた本を出しています。福島では除染のために汚染土をブルーや黒のシートで覆っています。ブルーの方は三年しかもたず、もう漏れ出しているそうです。黒は五年の耐用です。しかも子どもがそこにのぼって遊んでいるという怖い現実があります。中間貯蔵の前段階ですが、皆で集めて公園だった所に置いているという感じで除染をしています。こういうことをもつと考えていかななくてはならないと思います。ここに『原発いらぬ、いのちが大事の歌』という詩集の冊子があります。これを

書いた関久雄さんも、佐渡島に福島の子どもたちを連れていくプログラムを行なっています。彼は除染した砂を原発まで持つていきます。又、殺処分をする予定の牛を牧場（希望の牧場）に集めて世話をしている人がいます。その人も官邸前に土を持っていきます。これは俺たちの灰じゃない。あなたたちが責任をとれと言つて、東電の前時に持つていったということです。事故の当時の首相は菅さんで、あの時民主党のことを皆批判しましたが、結局原発は自民党が作ったものです。原子力の平和利用というまやかashiで。三・一一当日、当時の東電の会長は、テレビ会社各局の人たちと一緒に中国でゴルフをしていました。こんな中で真実を伝えられるのでしょうか。真実を伝えてくれるマスコミが本当になくなったという感じがしています。

感想など

未だ不十分な除染。子どもたちへの様々な影響の現実など、政府の対応の悪さや今後の原子力政策の方針、法整備の欠陥、更に他地域の原発の問題について、私たちは自分自身に関わる問題として見聞きし学ぶ中から、おかしいと思うことに対しては声をあげつつ、多くの人に伝え続けていくことと、福島の方々と共に一歩ずつ前進していく姿勢が大切だということを学んだ。

(まとめ袴田交子)

風景

「転席は神様に導かれました」一番簡単な答えですが、素直な気持ちです。私は頭で考えるより、身体で感じ行動する動物に近い人間です。そんな無鉄砲な私を神様はいつでもしっかりと支えてくださっています。そして神様に守られているという実感！どれほど感謝の祈りを捧げても十分ではありません。大昔から変わらず、今でも強い力に押され、弱者はそれに従わなければ生きられない社会。私自身共同体・組織の中で虐待や裏切りなどに心が傷つき、苦しめられた事は数知れません。娘がクリスマスチャンスクールに入学し、イエス様を知り、そして今から一七年前に私は初めて寿町に来ました。肉強食の社会にあつてもつた稲穂のごとく身を低くして、懸命に活躍する人との出会いで止めを刺されました。出来る事ならずと傍らにいたいと思いました。その頃、零細企業の中でも最たる少数派の着物仕立師の仕事を持ち、注文のない時は舞台衣装の手伝い。バブルがはじければ真つ先に打撃を受け休業。この町の人たちの話を聞く度に自分の歩みと重ねています。寿町で沢山の事を学びました。社会の中の出来事も知らない事が多く自分に呆れるほどです。人々の心の豊かさ暖かさに触れ、今一番嬉しいことは名前を呼ばれることです。ですから私も出来る限り名前を呼んでから挨拶しています。これからは人々の出会いの中で、喜びを共有し、元気でいたいです。なか伝道所は以前から越冬期間や「寿わく」等で関わりがあり、敷居はとくに外されています。ここでは気負うことなく、自然体で自分の居場所があり、安心でき幸せの極みにいます。

(岡安サダ子)

使信

知恵と知識のその先に

石倉夕子

わたしは心にこう言ってみた。「見よ、かつてエルサレムに君臨した者のだれにもまさって、わたしは知恵を深め、大いなるものとなった」と。わたしの心は知恵と知識を深く見極めたが、熱心に求めて知ったことは、結局、知恵も知識も狂気であり愚かであるにすぎないということだ。これも風を追うようなことだと悟った。知恵が深まれば悩みも深まり／知識が増せば痛みも増す。

コヘレトの言葉 一章 一六―一八節

皆さんは「コヘレトの言葉」にどういう感想を持っていますか？この書についてよく言われていることは、仏教に近いものがあるとか、あるいは虚無的、あるいは快樂主義的など色々と言われてきた書物です。旧約の中でも異端的で、異色のものです。文章の構造的には、知恵文学と同じ構造です。格言集、譬え、逸話、知恵の詩などで成り立っています。しかし他の知恵文学―ヨブ記や箴言など―とは異なり、知恵あるいは知識は近づ

きにくく、神は遠くて知ることができず、

ことによると無関心を装う神なのです。

一言で言うなら、可愛げのない、ひねくれ者です。そのためこの書は当時の教師集団の一人で、エリート階級の人物、もしくは集団ではないかと通常言われています。虚しさ漂うこの書物は難解で、親しみにくい文章でもあります。また逆に仏教の「色即是空・空即是空」と類似の考えではないかということから、一部の人には親しみ易い文章でもあります。皆さんにはひとまず、これらの前提を

全て白紙にしてもらいたいと思います。私たちはもしかすると一定の価値観の中で「コヘレトの言葉」を理解しているのかもしれない。この書を読む時どの立場において読むのか、考えるのかということが問われます。視座を変えることにより、違う形のコヘレトが現れるかもしれません。

コヘレトの言葉の作者は不明です。コヘレトという言葉から推測することは可能です。コヘレトという言葉はヘブライ語の「カハル」から来ています。集会に集まる、集合するという意味だそうです。このことからコヘレトは集会に集まり話す人、いわゆる「教師」を指しているようです。また一人ではなく複数の教師たち（師匠と弟子）とも言われています。書かれた年代は紀元前二五〇年頃。この時代は古代エジプト（ファラオ）の権

大王の將軍の一人（プトレマイオス）の支配下にあった時代です。この時代は小刻みに権力者が入れ替わり立ち代わりの状態で、エルサレムのあるパレスチナ地方は重要な商業の要所として、絶えず争奪戦に巻き込まれていました。そういう時代背景の中でコヘレトはこの書物をまとめたのです。

二節は口語訳聖書で覚えていらつしやるのではないでしょうか。「空の空、一切は空」です。この句はどう理解すればよいのでしょうか。ヘブライ語で同じ言葉の繰り返しは「強調」を表します。「空の空」とは「空」を表わしています。「空」という語は風や息、霧など空気の中で消えてしまうものを意味しています。そこから儂い、虚しいという訳になつたようです。二節―一節の中心は三節ではないでしょうか。「太陽の下での全ての辛い労働によつてどんな利益が生まれるのか」という疑問です。この後に人の手ではどうにもできない自然の移ろいが書かれます。この後の文章を読んでいくと救いようのない気持ちになつてしまいます。四節はこの世での命は束の間だと悟っています。陰鬱になります。しかし本当にそうでしょうか。ある視点からこの文章を見ると本当に虚しくなつてしまいます。それはコヘレトもそうだった

えーとねえ

お母さんの選ぶサンダルにことごとく「イヤ！」を連発の美宇ちゃん

そしてついにお目当てのサンダルが見つかって一言「これは私のほしかったものなのよー!!」

(お母さんよりセンスのよい 郭美宇 2才)

と言われているように、自分の生活は安定しているけれど、世の中を見ると大変だと思ってしまう視点です。たぶん読んでいて虚しくなる、陰鬱になるといのは、安定した経済的基盤のある、それなりに大きい教会で読むとそう感じるのかもしれない。私もずっとそうでしたし、そう教えられてきました。しかし運よくと言ったら語弊がありますが、私たちの伝道所は寄せ場・寿町にあります。ここから読めば少し違ったものが見えてきます。

プロレマイオスの時代、農民は支配者によって重税を課せられ、作物は奪われ、生活に必要な条件を取り上げられてしまいます。農民は借金をしながら作物を作り、終わることのない労働に、何の益もない労働に疲れ果てていたのです。この現実をコヘレトは考え、嘆いているのです。八節以下、「なにもかも物憂い」とは、すべての言葉は虚しく、退屈とい

うことのようなです。どんな言葉を持ってしても、農民・労働者の現状は変わらない。八節は教師としてのコヘレトの苦悩です。九節は「新しいもの」とありますが、権力、支配者が頭をすげ替えるだけで、本質は何も変わらないということでしょうか。虐げられる者は、権力者がかわったところで、顧みられることは無いのです。一〇節も同じです。虐げられ続けたものは、権力者がかわれば期待を持ちますが、結局は同じこと。それが繰り返されている状況が、このコヘレトの言葉を生んだのではないのでしょうか。一一節は働きに働いて、虐げられるだけの一生だった農民・労働者は誰からも顧みられることもなく、忘れ去られていくことへの嘆きではないのでしょうか。しかし本来歴史を動かしているのは、名を残した人々だけではなく、このような無名の人々なのだ。コヘレトは考えたのではないのでしょうか？それらの人々が顧み

られないことの虚しさ。一一節でコヘレトが言いたかったことではないでしょうか。一二節以下はソロモンのことが念頭に

あったと思われ。ユダヤの人々にとつて、ソロモン王は知恵の人として有名でした。それこそ名を残した人です。その王を推測させる言い回しで話を進めていきます。知恵の人であったソロモンの名を借りて彼に一七節の様な悟りを口にさせるのです。そして一八節では知識が深まるほど悩みも深まり、知識が増えると痛みも増えるまで言わせるのです。コヘレトは知恵が虐げられた人々を救えるのかという疑問があると思えます。知識が増えることは逆にエリートがさらに力を増し、虐げられる人々の苦しみも増すのではないかと悟ったのです。これらを語ることによりソロモンを代表する当時のエリート集団、特に国家宗教の祭司たちを皮肉っているのだと思えます。そしてまさに一八節のことが

昔から時間があると、本に埋もれている。バスの待ち時間など、本屋で時間を潰すことが多い。最近本屋で気になるのは、「ハイト本」いわゆる「嫌中憎韓」をあおる本の多さである。特に平積みのあるところにあると、嫌でも気付いてしまう。ハイト本は売れるらしい。売れば何で

も良いという出版社の姿勢は、政府の腰巾着と化しているマスコミと同じ。しかし、出版界内部から抗する動きが起こった。中心になったのは、三十代から四十代の編集者や営業、書店員とのこと。私と同じ世代。なんとなくうれしい。翻って日本基督教団の三〇代・四〇代、自分も含め、もっと冒険しようよ。(石倉夕子)

からどう生きていくのですかと・・・。今、日本ではどれだけ踏ん張って生きても、顧みられない状況があります。三年前の大震災で被災した人々、さらに原発事故で被災した人々、米軍基地を押し付

けられている沖縄やその他の地域の人々、労働者、農漁民、外国人・・・子どもから老人まで、弱い人々が顧みられることのない社会。これらの人々全てと出会うことは出来ませんが、それぞれの生活の場から一緒に声を上げていく。教会も堂々と「おかしい」と社会に訴えていく。私たちも歴史を動かす無名の一人になりたいものです。

支援献金

編集後記

福島の問題は、日本の問題だということに、私自身が気づく感性がなくて、I村で暮らしていた友を心配してはいたけれど、実は全く寄り添えていなかった。無関心と忘却が一番怖い。今からでも傷ついた人々と一緒に歩けるだろうか？